

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

(1) はじめに

鳥居松遺跡から出土した金銀装円頭大刀（以下、円頭大刀とする）は、日本国内出土の装飾大刀に系譜が求められない諸特徴を有している。ここでは、比較対象資料を朝鮮半島もしくは中国に広げ、この大刀にみられる諸特徴の系譜を明らかにし、本例の帰属時期について触れておきたい。

(2) 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

鳥居松遺跡出土の円頭大刀の諸特徴を確認しておく。柄頭および柄間は一体の柄木で形成されており、木芯部に彫刻を施した後、金銀板を押し込んで文様を立体的に表現している。柄木は表裏2枚合わせである。鐔をもたない呑口式の構造で、鞘は外されていたため詳細を知ることができない。柄頭は比較的短く、中央部に心葉形の懸通孔があげられている。柄頭には懸通孔を挟むように双龍文がみられ、柄間には連続波頭文と連珠文が施されている。柄縁の区画帯には、双連珠菱形文が用いられ、柄元の区画帯には同じ模様原理をもつ銅製金張りの責金具がはめられている。なお、責金具は製作後のある段階で補われた可能性がある。以下、鳥居松遺跡例にみられる諸特徴について類例をあげ、その系譜関係を検討しておきたい。

柄頭の形態 鳥居松遺跡例の柄頭の正面形は、柄縁側が若干狭く、柄頭先端側にむかって緩やかに膨らんでいる。柄頭は、幅（4.4cm）よりも全長（3.7cm）が短く、長幅比（長／幅の値）は0.84を示す。日本国内で出土する円頭大刀の柄頭は、幅よりも全長が長いものがほとんどで、鳥居松遺跡例のように短い柄頭をもつ事例は知られていない。

鳥居松遺跡例と類似した形態の円頭柄頭は、朝鮮半島南部から出土する事例に見出すことができる。朝鮮半島から出土する円頭大刀は5世紀末から6世紀前葉頃の製品とみられ、日本国内から出土する円頭大刀と比べて製作時期が遡る事例が数多く含まれる。公州宋山里4号墳（旧1号墳）例や、慶州金冠塚古墳例、慶山林堂6A号墳例などが最古段階の製品とみられ（Fig.82）、その長幅比は0.75～1.0程度の値を示している。後述するように、円頭大刀の柄頭は短いものから長いものへと変遷する傾向が指摘でき、柄頭が短い鳥居松遺跡例は古相を示しているといえる。

心葉形懸通孔 鳥居松遺跡例の懸通孔は心葉形（猪目形）を呈している。心葉形懸通孔も日本国内出土の円頭大刀には認められず、朝鮮半島からの出土例のみに散見できる。心葉形懸通孔をもつ円頭大刀としては、宋山里4号墳例、金冠塚古墳例、昌寧校洞11号墳例があげられ（Fig.75）、羅州新村里9号墳乙棺から出土した円頭刀子にも心葉形懸通孔が認められる。これらの事例はいずれも、5世紀末から6世紀初頭頃（TK47型式期～MT15型式期）

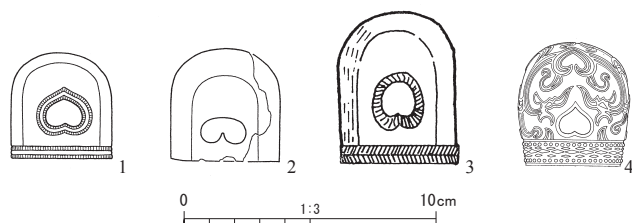


Fig.75 心葉形懸通孔をもつ円頭柄頭

1: 宋山里4号 2: 金冠塚 3: 校洞11号 4: 鳥居松

に位置づけられ、鳥居松遺跡例の製作時期の一端がうかがえる。

柄木の製作技法 鳥居松遺跡例の柄木は表裏2つの材を合わせて成形しており、柄頭には表裏2枚の金（銀）板を張っている。金属板を表裏2枚合わせて柄頭を作り出す手法は、町田章が示すA型（町田1987）に相当し、古式の製作技法が採用されている。茎は柄頭まで至らず、柄間の中間付近程度でおさまる点も、装飾大刀としては古相といえる。

木彫金銀張技法 本例の柄頭と柄間は木芯に彫刻を施し、これに金銀板を押し付けることで模様を浮き出させる木彫金銀張技法によって装飾されている。木彫金銀張技法によって製作されている装飾大刀として、奈良県藤ノ木古墳4号刀や群馬県綿貫観音山古墳例（Fig.76）、栃木県別処山古墳例などが知られる。これらは、倭系大刀を祖形に朝鮮半島にみられる金属装大刀の要素を取り入れて試作的に製作されたもので、しばしば折衷系統と評価されている（大谷1999、橋本2006）。

木彫金銀張技法は、勝部明生・鈴木勉によって、倭において生み出された技法と評価された（勝部・鈴木1998）。この解釈は、綿貫観音山古墳例にみられる「双直線刻文」（三本の凸線の中央1本を刻む模様帯）が、倭系遺物である鹿角製刀装具の直弧文の縁飾りに系譜が認められることから導き出されたものである。

いっぽう、鳥居松遺跡例にみられる木彫金銀張技法は、先にあげた諸例と基本構造は同じであるが、龍文や連続波頭文といった模様は倭製とみられる事例に系譜が求められない。木彫金銀張技法をもつ装飾大刀を、すべて同一系譜として捉えることは困難である。木彫金銀張技法を採用する点

だけでは、本例の製作地を倭と評価することは難しい。むしろ、倭製装飾大刀の木彫金銀張技法に影響を与えたような外来系譜の事例として位置づけるほうが妥当とみられる。

柄頭における龍文 鳥居松遺跡例には柄頭の表裏に双龍が配置されている。金銀装円頭大刀に龍文を施した事例は知られていないが、関連する資料は若干ながら認められる（Fig.77）。金銀装円頭大刀は懸通孔周りの装飾を除いて特別な模様をもたないことを基本とするが、金冠塚古墳例（金製、Fig.77-3）や伝高霊出土資料（銀製、湖巖美術館蔵、Fig.77-4）に、獣面文もしくは鬼面文が表現されたものが知られる。後者と酷似する資料は、出土地が不明瞭ながら朝鮮半島南部出土と伝えられる小倉コレクション中にもある。これらの柄頭の長幅比はすべて1.0以下を示しており、円頭大刀の中でも最古相の一群に含めることができる。金銀装円頭大刀に獣面文を施す系譜は、円頭大刀の出現期から存在していたことが分かる。

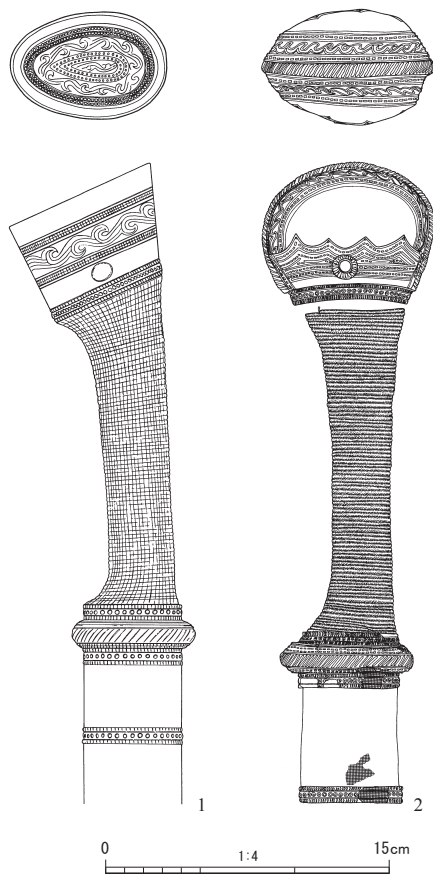


Fig.76 木彫金銀張技法をもつ装飾大刀

1: 藤ノ木 2: 綿貫観音山

金銀装円頭大刀は無文のものが多く、鉄製円頭大刀においては銀象嵌で柄頭に模様を施すことが一般的である。銀象嵌で表現される模様の多くは亀甲繫鳳凰文や心葉文であるが、龍文や鬼面文が描かれた資料がある。滋賀県北谷7号墳例（Fig.77-2）には、柄頭表裏それぞれに2匹の向かい合う龍が描かれている。龍文には省略傾向が認められるが、中央で口を開けた龍が向かい合う様子がうかがえる。昇り龍か降り龍かという違いはあるが、鳥居松遺跡例との類似性が最も高い構図といえるだろう。北谷7号墳例は鉄製銀象嵌円頭柄頭の中でも全長が短く（長幅比1.05）、朝鮮半島製の可能性も考えられる資料である。鳥居松遺跡例のような龍文を施した金銀装円頭大刀を元に、銀象嵌で類似した構図を描いたものと評価できる。

鉄製銀象嵌円頭柄頭には、香川県母神山古墳群例（Fig.77-5）のように、鬼面文をもつものも知られる。柄頭の形態は伸長化しているが、象嵌模様は日本国内での出土品と比べると写実的である。横断面が隅切り長方形（八角形）である点も古相の様相であり、町田章はこの大刀を加耶もしくは百濟製と評価している（町田1991）。母神山古墳群例の構図も、獣面文をもつ金銀装円頭大刀との関連を認めてよいだろう。以上の事例から、鳥居松遺跡例のように金銀装円頭大刀の柄頭に龍文や獣面文などを施すことは、朝鮮半島の出土品もしくは朝鮮半島製と想定できる製品に認められる特徴と評価できる。

龍文の特徴 鳥居松遺跡例の柄頭に表現された龍文について、検討しておきたい（Fig.78）。龍文は全身が明確であり、2本ないしは3本の凸線によって表現されている点が特徴である。

凸線を用いた龍の表現は、加耶地域で多く出土する環頭大刀の環体のそれと類似している（Fig.78-1～4）。陝川玉田M3号墳出土例では、龍の羽毛が3～4本の凸線で表現され、鳥居松遺跡例との関連が指摘できる。加耶系環頭大刀の環体の龍文は、表現の簡略化によって凸線を多用する傾向が認められ（町田1997）、こうした変化の延長上に鳥居松遺跡例の龍文の表現を位置づけることも可能であろう。ただし、加耶系環頭大刀にみられる龍文は、舌や角が長く表されていること、タテガミや背鱗、腹部などが連続する弧線で表現されていること、脚部の形態が明確であることなど、鳥居松遺跡例との違いも多く、両者は全く同一系譜のものとはいえない。なお、日本国内から出土する単龍鳳環頭大刀の環体にも龍文がみられるが、その表現は環体そのものを龍の体にみたもので、加耶系環頭大刀のそれとは異なるものである。

日本国内から出土する龍文関連遺物の中では、銀象嵌大刀に表現上の関連が見出せる。銀象嵌された龍は、刀身や鞘口・鞘尻金具にみられる。宮崎県島

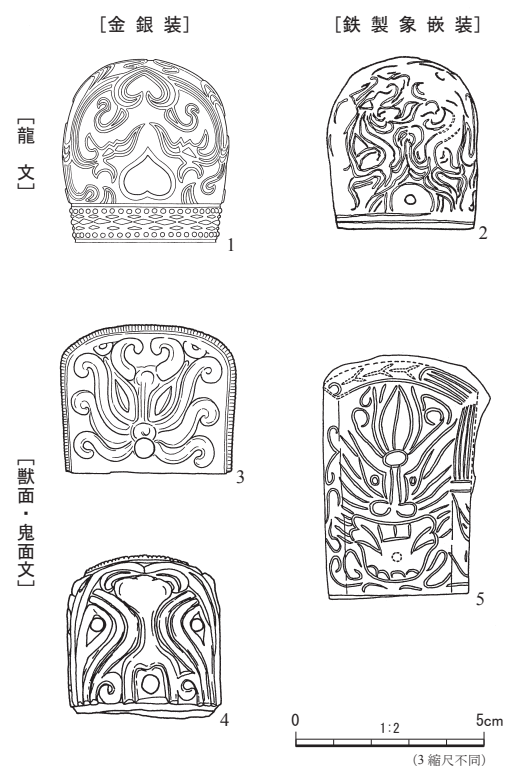


Fig.77 龍文・獣面文を表現する円頭大刀
1: 鳥居松 2: 北谷7号 3: 金冠塚 4: 伝高霊 5: 母神山

内 114 号地下式横穴例や奈良県新沢 327 号墳例にみられる龍文は、刀身に象嵌されたもので、龍の全身の特徴をよく伝えている (Fig.78-5)。これらの事例は、共伴遺物から 6 世紀前葉に位置づけられ、舌や角、下顎、羽毛、脚、尾など多くの部位を 3 本線で表現している点で鳥居松遺跡例との類似点が指摘できる。鳥居松遺跡例と近接する製作時期が想定できるだろう。ただし、この 2 例の龍文は、頸部から胴部の内部を弧線で充填する点が、鳥居松遺跡例と異なる。舌や角が長く表されていることも相違点に加えられよう。

銀象嵌の龍文は、鞘口・鞘尻金具にもみられ (Fig.78-6・7)、6 世紀前葉から 6 世紀後葉の間において表現の簡略化過程がうかがえる (小林・有井 1996)。ただし、これらの事例においても、胴部を連続する弧線で表現することや、舌や角をもつことは変わらない。

以上、鳥居松遺跡例の龍文と関連する事例として、加耶系環頭大刀の環体と銀象嵌大刀にみられる龍文とを比較した。双方とも、併行する数本の線によって模様を描く点では鳥居松遺跡例との関連が見出せるが、胴部の表現と舌や角をもつ点が本例と異なる。類似した表現が採用されていることから、先に紹介した諸例は互いに近い時期に製作されたものと捉えられるが、細部の表現に違いがあることを考慮すると、製作地や工人の系譜は異なるとみられよう。

双連珠菱形文 責金具や区画帯の特徴は、柄頭形式の違いを超えて製作時期や製作地の系譜がうかがえる属性として注目できる。鳥居松遺跡例には、柄縁の区画帯と柄元の責金具に双連珠菱形文が採用されており、類例との比較が可能である。なお、責金具は先述のとおり補修の際に追加され

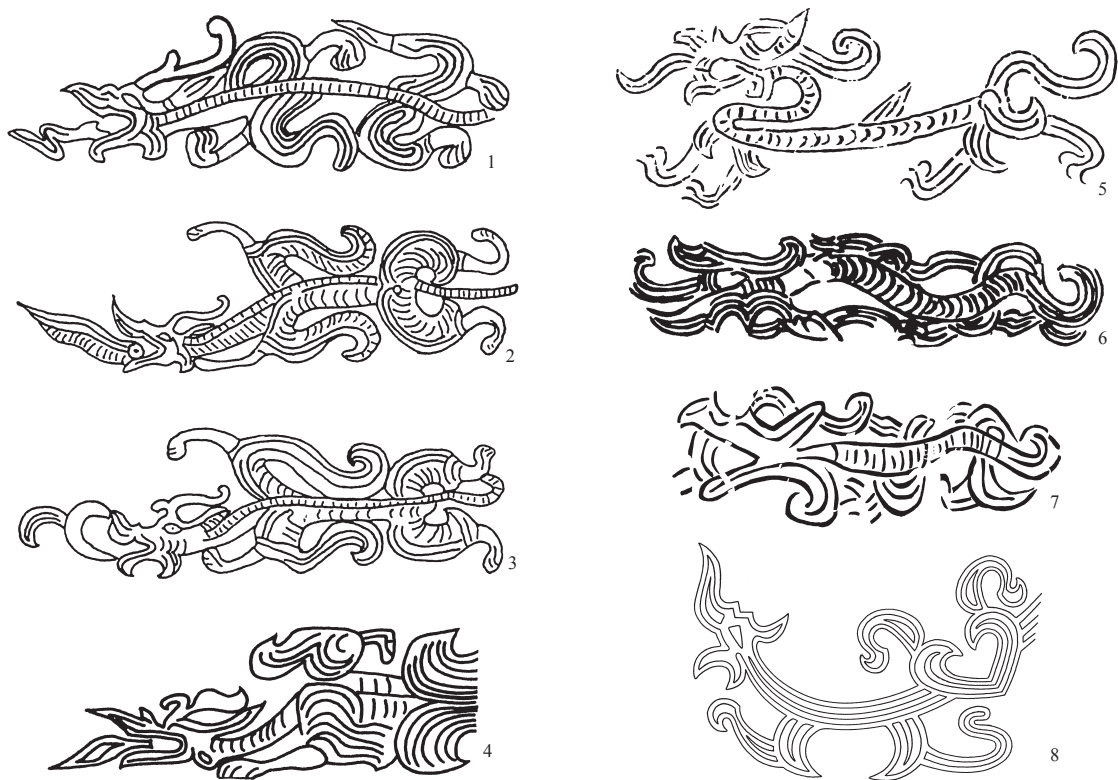


Fig.78 鳥居松遺跡例と類似する龍文の諸例

1: 玉田 M3 号 1 号刀 2: 同 2 号刀 3: 同 3 号刀 4: 伝朝鮮 (安宅コレクション)
5: 鳥内 114 号地下式横穴 6: 井田川茶臼山 7: 明ヶ島 15 号 8: 鳥居松

た可能性が高いが、当初から刻まれた模様と同じ構成原理が採用されている。

責金具の両端部に刻みを入れて連珠状に表現し（双連珠）、中央部に円形文（魚々子文）や菱形文を並べる装飾技法は、日本国内から出土する環頭大刀の属性として注目されている。責金具の模様は、A類）双連珠円形菱形文、B類）双連珠菱形文、C類）双連珠円形文の三種に分類され、単龍鳳環頭大刀の責金具を整理した新納泉によると、日本国内出土資料による比較では、A類（単龍鳳Ⅲ式）→B類（単龍鳳Ⅳ式）→C類（単龍鳳Ⅴ式）の順に推移することが示されている（新納 1982）。

鳥居松遺跡例に採用されているB類は、奈良県珠城山1号墳出土の三葉文環頭大刀（Fig.79-7）にみられるほか、静岡県宇洞ヶ谷横穴例や千葉県山王古墳例、千葉県城山1号墳例など、新納が示す単龍鳳Ⅳ式に集中する（Fig.79-4～6）。鳥居松遺跡例における責金具を伴う補修が日本国内で行われたと解釈するなら、その時期は単龍鳳Ⅳ式の時期に併行すると捉えることも可能である。

いっぽう、比較例を朝鮮半島出土資料に求めると、B類は玉田 M3 号墳出土の単鳳環頭大刀や羅州伏岩里3号墳 96 石室出土大刀に認められ、公州武寧王陵出土の円頭刀子（王妃共伴）にも同様の表現が見出せる（Fig.79-1～3）。C類にかんしても、おなじく武寧王陵出土の円頭刀子（王妃共伴）をはじめ、金冠塚古墳出土の円頭刀子、羅州伏岩里3号墳 96 石室出土の三葉文環頭刀などにみられる。これらの資料は、国内出土の単龍鳳Ⅳ式の時期を遡る事例である。鳥居松遺跡例の製作地を朝鮮半島に求めるなら、責金具の模様構成のみから製作時期を細かく絞り込むことは困難といえる。なお、C類の双連珠円形文は伝連山里例や、鳥根県岡田山1号墳例、藤ノ木古墳例など、古式の円頭大刀にも散見でき、その模様系譜をうかがう上でも注目できる。

鳥居松遺跡例の柄縁の区画帯は、双連珠文の間に3列の菱形文が巡る点で一般的なB類の模様構成とは異なる。本例にみられる模様は、双連珠菱形文の中でも装飾的要素が高く、古相の特徴を示しているとみなせよう。3列の菱形文は、主模様である中央の菱形文と両端の空間を埋めるための副次的な模様列の集合とみなせ、武寧王陵から出土した単鳳環頭大刀の鞘飾り金具との関連も指摘できる。

以上に示した双連珠菱形文の比較資料から、鳥居松遺跡例の製作時期の上限を武寧王陵出土資料（武寧王、523年没）に、下限を新納が示す単龍鳳Ⅳ式（TK43 型式期前半併行、6世紀後葉）に求めることができる。このうち、下限の時期を、責金具を伴う補修の時期とみれば、倭における補修の可能性も充分考えられる。

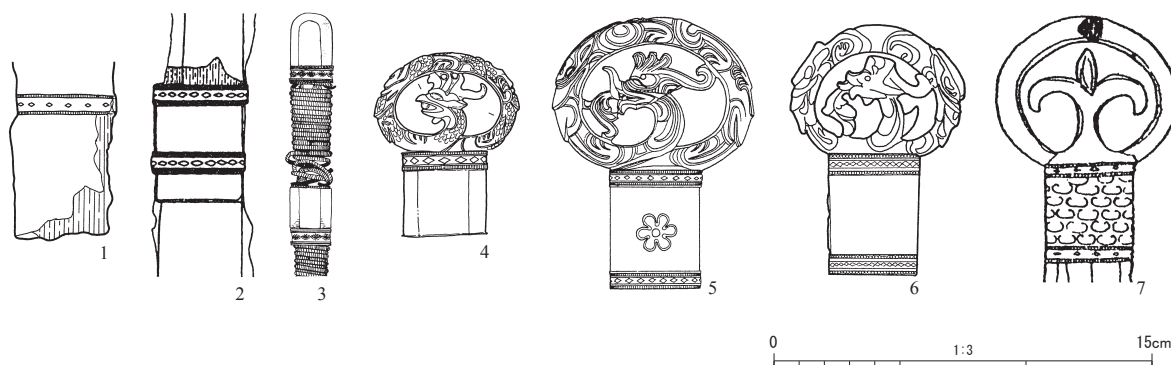


Fig.79 双連珠菱形文の諸例

1: 玉田 M3 号 2: 伏岩里 3 号 96 石室 3: 武寧王陵 4: 宇洞ヶ谷 5: 山王 6: 城山 1 号 7: 珠城山 1 号

連続波頭文の系譜 鳥居松遺跡例の柄間には、魚々子文状に広がる連珠文と連続波頭文が立体的に表現されている。連珠文は、朝鮮半島南部から多く出土する金製装身具の粒金細工を彷彿とさせる。いっぽう、連続波頭文を立体的に表現する手法は、日本国内や朝鮮半島には類例が知られず、外来系譜の模様とみられる。鳥居松遺跡例と類似した連続波頭文をもつ資料として、中国北魏から隋代に特有の寝台形石製装具があげられる (Fig.80-1・2)。山本忠尚が整理したように (山本 2006)、棺を置くための石製の台 (圀屏石牀) を構成する石製台座 (石牀) の正面板には、立体的な平行線で充たされた連続波頭文がみられる。類似した模様は、大同南郊出土の人物文硯 (解 1979) や北魏製金銅仏の台座 (金 1994) にも見出せる (Fig.80-3・4)。平行線表現の立体的な連続波頭文は金銅仏に古い時期のものが認められるが、およそ北魏平城期の太和年間 (477 ~ 494 年) を中心とするものと捉えられる。古式の円頭大刀の製作時期と比較しても時期的に隔たりはない。これらの事例が示すように、連続波頭文は台座の縁模様と関連があり、格座間の外形に取り入れられていく。高句麗の事例として、南浦双楹塚の壁画に描かれた格座間模様を関連資料としてあげておく (Fig.80-5)。関連資料が少なく不明確な要素が多いが、鳥居松遺跡例にみられる平行線表現の立体的な連続波頭文は、中国北朝 (北魏) に系譜が求められる可能性を指摘しておきたい。

単線で表現される連続波頭文は、装飾大刀に好んで用いられている。朝鮮半島出土品では、慶州鷄林路 14 号墳出土の装飾剣のほか、装飾大刀の銀象嵌模様に比較的多くの事例が知られる (Fig.80-6 ~ 9)。日本国内においても、朝鮮半島製の可能性が高い京都府穀塚古墳出土の単鳳環頭大刀 (Fig.80-10) にみられる。これらの資料は、5 世紀に遡る事例が多く、鳥居松遺跡例が製作さ

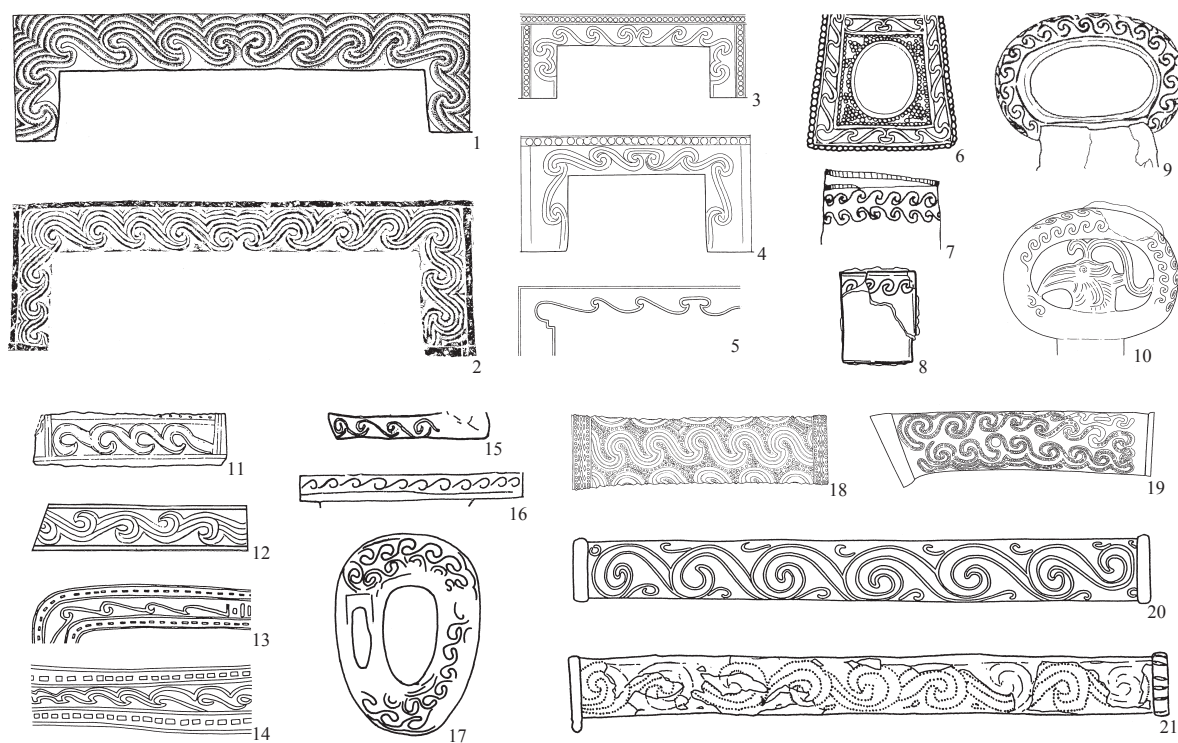


Fig.80 連続波頭文の諸例

1: 大同南郊 M112 2: 大同北師院 M5 (太和元年 (477) 銘) 3: 大同南郊出土 4: 新田グループコレクション 5: 南浦双楹塚 6: 鷄林路 14 号 7: 伝朝鮮 (東博蔵) 8: 玉田 M3 号 9: 花城里 A1 号 10: 穀塚 11: 生実所在 12: 藤ノ木 13: 別処山 14: 綿貫観音山 15: 芝塚 16: 井田川茶臼山 17: 台所山 18: 鳥居松 19: 金鈴塚 20: かわらけ谷横穴墓群 21: 伝藤岡市小林

れる以前から、連続波頭文が装飾大刀と関連が深い模様として採用されていたことが知られる。

装飾大刀と連続波頭文との関連は、6世紀代の日本国内出土資料にも数多く認められる。連続波頭文は、木彫金銀張技法で製作された装飾大刀（Fig.80-11～14）や、銀象嵌大刀の模様（Fig.80-15～17）に多用されており、後者においては、C字形やS字形、円形などへ変化していく（橋本1989・1993）。6世紀末以降、倭製装飾大刀の装具が斉一化すると、金銅板を張った柄間や鞘に連続する渦文が施されるようになる。鳥居松遺跡例の出土によって、装飾大刀の柄間や鞘金具に施される渦文の原形は連続波頭文にあることが示せるようになった（Fig.80-18～21）。倭で製作された装飾大刀の柄間や鞘金具の模様は形態変容が顕著で、連続渦文や唐草文的な要素を取り入れた模様も数多い。

柄間に金属板を巻きつける技法についても、鳥居松遺跡例からの系譜が想定できる。ただし、鳥居松遺跡例の柄間には木彫銀張技法が用いられていることに対して、倭製の装飾大刀は金銅板を用いて鑿で模様を打ち出す技法が採用されており、その技術系譜は大きく異なる。鳥居松遺跡例は柄間に金属板を巻きつける初源的な事例とみなせるが、倭において金銅板巻の柄間が出現するまでの開きは、なお大きいといえるだろう。

鳥居松遺跡例の系譜 円頭大刀の形態的特長と製作技法、模様の検討を通じ、鳥居松遺跡例が日本国内出土品より、朝鮮半島出土品との関連が高いことを示すことができた。木彫金銀張技法や立体的な連続波頭文の遡源など今後の検討課題は多いが、現状の資料による限り鳥居松遺跡例は朝鮮半島製と捉えてよいと判断できる。その製作時期の上限は、武寧王陵出土資料に求めることができるが、省略傾向をもつ龍文や連続波頭文といった従来ほとんど知られていない模様を採用していること、柄間を金属張にするという新しい様相をもつことから、武寧王陵出土資料の次段階、6世紀前葉の新しい時期（TK10型式古相期併行）に位置づけるのが妥当であろう。

心葉形懸通孔や双連珠菱形文を用いる大刀や刀子の事例は百濟熊津期（475～538年）の資料に散見できる（金2007）。また、龍文の特徴から、本例は加耶との関連も指摘できた。鳥居松遺跡例の製作地を絞り込むことは難しいが、現状の資料による限り、百濟もしくは加耶にその候補地を求めておきたい。

なお、この大刀は、製作後において責金具の後補を伴う補修が行われているが、この補修が、朝鮮半島で行われたか、倭で行われたかは明らかでない。仮に倭で補修されたとすると、責金具の類例が単龍鳳Ⅳ式（新納1982）に位置づけられることから、同型式の想定時期である6世紀後葉（TK43型式期前半）に実施されたものと捉えられる。

（3）円頭大刀の型式分類と変遷

前節に行った円頭大刀の諸属性の検討をふまえ、円頭大刀の型式分類とその変遷観について触れておきたい。

研究史 円頭大刀の型式分類および編年については、瀧瀬芳之（瀧瀬1984・1986）および町田章（町田1987）による体系的な論考がある。瀧瀬は、佩用方法と鐔の有無をもとに円頭大刀を5型式に分け、Ⅰ式）無鐔釣手佩用、Ⅱ式）有鐔釣手佩用、Ⅲ式）八窓鐔二足佩用、Ⅳ式）無窓鐔二足佩用金銅装鞘、Ⅴ式）無窓鐔二足佩用準素鞘とした。各型式の年代については、Ⅰ式を5世紀後葉～6世紀中葉に、

Ⅱ式、Ⅲ式を6世紀第3四半期に、Ⅳ式を6世紀末～7世紀初頭に、Ⅴ式を7世紀前半にそれぞれあてはめている。いっぽう、町田は儀杖大刀全体の変遷観を示した上で、円頭大刀（頭椎大刀を含む）を2系統11型式に細分した。町田が重視するのは、柄頭を構成する金属板の成形技法であり、A型）表裏分離型、B型）一体袋状型に分離した。同時に町田は円頭大刀にみられる「加耶式」と「倭式」の系統差を重視し、それぞれの推移を示した。

型式分類 滝瀬や町田の分類は、円頭大刀の変遷を示す重要な指摘であるが、全体の装具や細かな製作技法が判明しない事例については適用が難しい。ここでは環頭大刀など装飾大刀の検討で一般的な柄頭に着目した型式分類を行い、製作技法や付属する装具、佩用方法などの特徴を補足的に捉えて、円頭大刀の変遷を素描しておきたい。本稿では、円頭大刀の柄頭を形態と材質から次のように型式分類する。

円頭Ⅰ式 金銀装短頭 長幅比 1.2 未満 柄頭に装飾をもつものを含む

円頭Ⅱ式 金銀装長頭 長幅比 1.2 以上 柄頭に装飾をもつものを含む

円頭Ⅲ式 金銅装無文 長幅比 1.2 以上 金銅板を用い無文のもの

円頭Ⅳ式 鉄製象嵌装 短頭と長頭の双方 鉄製柄頭に金銀象嵌を施す

円頭Ⅴ式 木芯漆装 長幅比 1.2 以上 木芯で表面に漆を塗布する

柄頭の長短にかんしては、Tab.1の比較で明確なように、懸通孔が心葉形を呈する一群と、懸通孔の周りに花形装飾をもつ一群の違いを重視する。前者の長幅比は0.84～1.11であり、比較的短いものが多いことに対し、後者の長幅比は1.24～1.31と、相対的に長い。両者を分ける基準として長幅比1.2という値の妥当性がうかがえる。後述するように、この違いは時期差を反映するものと捉える。なお、鉄製銀象嵌円頭柄頭にも懸通孔の周りに花形模様が描かれるものがあるが、こうした個体の長幅比も1.33～2.00の値を示しており、先の想定を補強する。以上のことから、懸通孔の形状やその周りの装飾の有無が円頭柄頭の細分上、有効な指標と捉えられる。以下、円頭柄頭各型式の細分案と諸属性について触れておく。

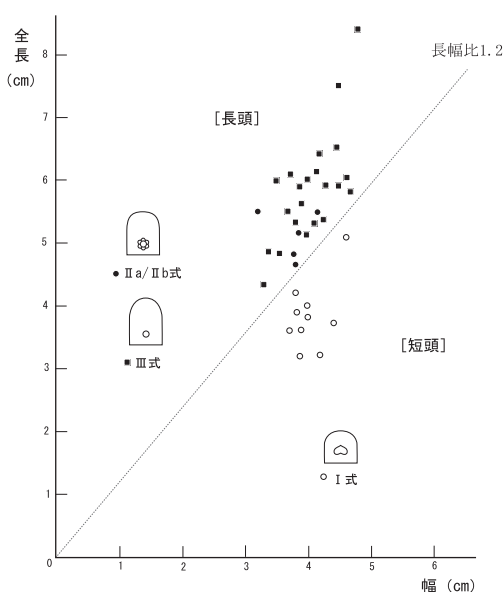


Fig.81 円頭柄頭の形態比較

円頭Ⅰ式 円頭Ⅰ式は、Ⅰa式）懸通孔が心葉形のもの、Ⅰb式）懸通孔が円形のものの2種に細分できる。また、Ⅰb式には獣面文などの装飾をもつものが含まれる。円頭Ⅰ式は、柄頭が銀装であることが一般的である。柄間は金属線巻にするものも多く、鞘との関係が判明するもの全てが鍔をもたない呑口式である。佩用方法がうかがえる事例をみると、吊手佩用（縦佩）が大多数とみられる。円頭Ⅰ式の出土地は朝鮮半島に集中し、彼の地で製作されたものと判断できる。

円頭Ⅱ式 円頭Ⅱ式は、Ⅱa式）円形懸通孔の周りに花形装飾が施されるもの、Ⅱb式）懸通孔の周りに特別な細工が施されないもの、に細分できる。円頭Ⅱ式も柄頭本体を銀装にするものがほとんどであるが、藤

ノ木古墳例のように金銅装のものがある。藤ノ木古墳例は、材質の点では後述するⅢ式と同じであるが、花形装飾や拵えの類似から、Ⅱ a 式に含めて捉えておきたい。

なお、島根県古天神古墳例や島根県上塩冶築山古墳例、別処山古墳例など、円頭Ⅱ式の中には柄の刃側が弧状に彎曲する倭系大刀との関連が見出せるものが知られる（町田 1987、大谷 1999、橋本 2006）。これらをⅡ c 式として分離しておきたい。Ⅱ c 式は柄頭の形態や大きさが他の円頭大刀と異なり、系譜を異にする試作品的な側面が強い。

円頭Ⅱ式も柄間を金属線巻にするものが多く、鞘との関係は、鐔をもたない呑口式（Ⅱ a 式、Ⅱ b 式）と鐔をもつ合口式（Ⅱ c 式）の双方がみられる。前者が外来系で古相、後者が倭系で新相の特徴である。佩用方法は縦佩であることが多いが、Ⅱ c 式には横佩とみられるものが含まれる。円頭Ⅱ式の多くも朝鮮半島で製作されたものとみられるが、倭系の要素をもつⅡ c 式は日本国内で製作されたとみられる。

円頭Ⅲ式 円頭Ⅲ式は柄頭に金銅板を用いるものである。懸通孔に金具が嵌められたものがあるが、柄頭本体は無文である。金属装の拵えが残存するものが多く、その特徴から細分が可能である。ここでは、柄間の特徴を重視し、Ⅲ a 式) 柄間を金属線巻にするもの、Ⅲ b 式) 柄間を金銅板張にするもの、に分類する。前者が古相、後者が新相の特徴である。また、円頭Ⅲ式の中には、金銅製の覆輪を用いたものが知られる。柄頭本体の表裏は金銅板を充てたものと、木芯が露出したものがあるが、こうした特徴を有する柄頭をⅢ c 式として分離する。円頭Ⅲ式は合口式であり、喰出鐔や無窓鐔を伴う。Ⅲ a 式の中に縦佩にするものが若干知られるが、円頭Ⅲ式のほとんどは横佩であり、Ⅲ b 式やⅢ c 式には佩用金具として吊手孔付佩用金具が附属する事例が多い。また、柄間を金銅板張にするⅢ b 式やⅢ c 式は、鞘も金銅板張にすることが一般的である。

円頭Ⅳ式 鉄製象嵌装の円頭Ⅳ式は、柄頭の大きさと形態の違いによって、Ⅳ a 式) 長幅比 1.2 未満の短頭のもの、Ⅳ b 式) 長幅比 1.2 以上の長頭のもの、Ⅳ c 式) 長頭で幅 3.5cm 以下の小型のもの、の 3 種に分類できる。Ⅳ a 式は金銀象嵌によって、龍文や双鳳凰文が表現されるものが含まれる。これらの資料は、模様が明確で、古相を示している。Ⅳ b 式は亀甲繫鳳凰文をもつ円頭柄頭の大部分が含まれる。銀象嵌模様の簡略化から 5 ～ 6 段階程度の細分が可能である（橋本 1986・1993）。Ⅳ c 式は心葉形文をもつものが多く、小型の刀に附属するとみられる。また、Ⅳ c 式は鞘尻金具である可能性も考慮される。

Ⅳ b 式の群馬県平井 1 号墳例や岡田山 1 号墳例は柄間が金属線巻で、刃側が弧状に彎曲し、断面蒲鉾状鐔や無窓鐔を伴う。柄の形状から倭に伝統的な落とし込み技法が採用されているとみられる点で、先にⅡ c 式とした一群との関連がうかがえる資料である（町田 1987）。奈良県布留遺跡や静岡県山ノ花遺跡からは、5 世紀代に遡る木製の円頭形柄頭や頭椎形柄頭をもつ装具が出土しており、倭の中に存在した木製円頭形の柄頭をもつ大刀（置田 1985）との関連も考慮すべきであろう。

円頭Ⅳ式の多くは柄頭が遊離して出土しており、柄間の詳細をうかがうことができない。古相を示すⅣ a 式は呑口式であった可能性が高いが、新相を示すⅣ b 式は有窓鐔を伴うことが多く、合口式であったことが知られる。円頭Ⅳ式には、外来系と倭系の双方が混在している可能性がある。佩用方法も明確でないものがほとんどであるが、横佩にされるものが大多数であったと想定できる。

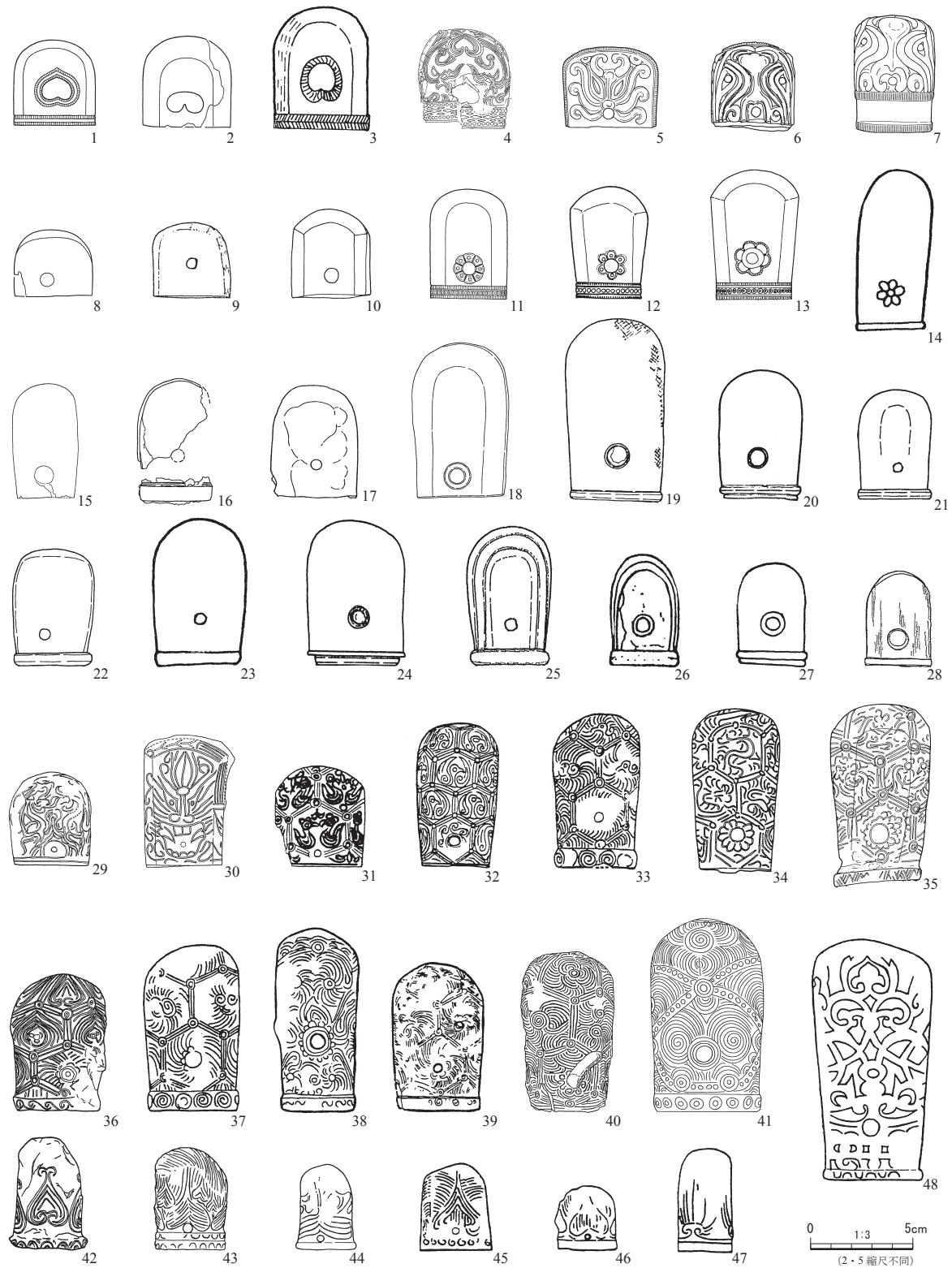


Fig.82 円頭大刀柄頭の諸例

1: 宋山里4号 2: 金冠塚 3: 校洞11号 4: 鳥居松 5: 金冠塚 6: 伝高霊(金東鉦コレクション) 7: 伝朝鮮(小倉コレクション) 8: 宋山里6号 9: 校洞7号 10: 伝朝鮮(李養璫コレクション) 11: 伝連山里(小倉コレクション) 12: 岡田山1号 13: 藤ノ木 14: 古天神 15: 宇洞ヶ谷横穴 16: 穴が澄 17: 狐塚 18: 鶴巻塚 19: 風返稻荷山(1) 20: 風返稻荷山(2) 21: 風返稻荷山(3) 22: 平等寺向原I-1号 23: 川内天王山 24: 宮口11号 25: 御山SX015 26: 六万部 27: 岡本1号横穴 28: フゴッペ洞窟 29: 北谷7号 30: 母神山古墳群 31: 星塚2号 32: 権現山 33: 伝藤岡市北郷 34: 平井1号 35: 岡田山1号 36: 芝塚 37: 伝高崎市岩鼻 38: 鷹ノ巣 39: 梶山 40: 塚花塚 41: 原分 42: 芝塚 43・44: 鬼塚2号 45: 中田横穴 46: 赤麻 47: 久ヶ原48号横穴 48: トトコチ山

Tab.1 円頭大刀属性分析表

Fig. 82	出土地等	型式	材質	長	幅	長幅比	柄頭	懸通孔	柄間	合せ・鐔	佩 用	鞘 尻
円頭Ⅰ式（金銀装短頭）												
1	公州 宋山里4号	I a	銀装	3.6	3.9	0.92	無文	心葉形	—	—	—	平尻・蟹目釘
2	慶州 金冠塚	I a	銀装?	—	—	1.00	無文	心葉形	—	—	—	—
3	昌寧 校洞11号	I a	銀装	5.1	4.6	1.11	無文	心葉形	銀線巻	呑口	吊手切込（縦佩）	—
4	静岡 鳥居松	I a	金銀装	3.7	4.4	0.84	龍文	心葉形	銀板張	呑口	—	—
5	慶州 金冠塚	I b	銀装?	—	—	0.89	獸面文	円形	—	—	—	—
6	高靈 伝高霊（金東銘コレ）	I b	銀装	4.0	4.0	1.00	獸面文	円形	銀線巻	呑口	縦佩	—
7	韓国 伝朝鮮（小倉コレ）	I b	銀装	3.8	4.0	0.95	獸面文	円形	—	—	—	—
8	公州 宋山里6号	I c	銀装	3.2	4.2	0.76	無文	円形	—	—	—	—
—	慶山 林堂6A	I c	銀装	3.2	3.9	0.82	無文	円形	有機質	—	—	—
9	昌寧 校洞7号	I c	銀装	3.6	3.7	0.97	無文	円形	—	—	—	—
—	梁山 夫婦塚	I c	銀装	3.9	3.8	1.03	無文	円形	有機質	呑口	吊手切込（縦佩）	平尻
10	韓国 伝朝鮮（李義璋コレ）	I c	銀装	4.2	3.8	1.11	無文	円形	—	—	吊手切込（縦佩）	—
円頭Ⅱ式（金銀装長頭）												
11	韓国 伝連山里（小倉コレ）	II a	銀装	4.8	3.8	1.26	無文	円形花形飾	銀線螺旋巻	呑口	縦佩か	平尻
12	鳥根 岡田山	II a	銀装	4.7	3.8	1.24	無文	円形花形飾	銀線巻	呑口	縦佩か	平尻・蟹目釘
13	奈良 藤ノ木	II a	金銅装	5.5	4.2	1.31	無文	円形花形飾	銀線巻	呑口	縦佩か	平尻
15	静岡 宇洞ヶ谷横穴	II b	銀装	5.5	3.2	1.72	無文	円形	（有機質）	（喰出鐔）	（横佩か）	—
16	岡山 穴ヶ辻	II b	銀装	5.2	3.8	1.37	無文	円形	銀線螺旋巻	呑口	—	—
—	静岡 石川 T3号	II b?	銀装	—	3.3	—	無文	—	—	—	—	—
14	鳥根 古天神	II b	銀装	7.5	3.5	2.14	無文	円形花形飾	銀線巻	無窓鐔	環付佩用金具	平尻・蟹目釘
—	鳥根 上塩治築山	II c	銀装	9.2	5.8	1.59	無文	円形	銀線巻	八窓鐔	横佩か	—
—	栃木 別処山	II c	銀装	7.0	6.8	1.03	模様帯	円形	銀線巻	蒲鉾鐔	吊手	平尻・蟹目釘
円頭Ⅲ式（金銅装無文）												
17	宮崎 狐塚	III a	金銅装	5.4	4.2	1.29	無文	円形	銀線巻	無窓鐔	—	—
—	茨城 伝舟塚	III a	金銅装	5.3	4.1	1.29	無文	円形	銀線巻	無窓鐔	横佩	丸尻
18	千葉 鶴巻塚	III a?	金銅装	7.5	4.5	1.67	無文	円形	—	—	吊手孔付佩用金具	丸尻
19	茨城 風返稲荷山 (1)	III a	金銅装	8.4	4.8	1.75	無文	円形	金銅線巻	無窓鐔	横佩	丸尻
20	茨城 風返稲荷山 (2)	III a	金銅装	5.6	3.9	1.44	無文	円形	金銅線巻	喰出鐔	吊手切込	平尻
21	茨城 風返稲荷山 (3)	III b	金銅装	4.8	3.5	1.37	無文	円形	金銅板張	—	吊手孔付佩用金具	平尻・蟹目釘
22	福岡 平等寺向原 I -1号	III b	金銅装	5.1	4.0	1.28	無文	円形	金銅板張	—	—	—
23	群馬 川内天王山	III b	金銅装	6.5	4.5	1.44	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
24	新潟 宮口11号	III b	金銅装	6.4	4.2	1.52	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	群馬 伝旧多野郡八幡村	III b	金銅装	5.5	3.7	1.49	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	平尻・蟹目釘
—	千葉 新坂1号	III b	金銅装	5.3	3.8	1.39	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	平尻
—	大阪 三田市13号	III b	金銅装	6.0	4.6	1.30	無文	円形	金銅板張	八窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	長野 塚穴原1号	III b	金銅装	4.8	3.4	1.41	無文	円形	金銅板張	—	—	—
—	群馬 伝高崎市上豊岡	III b?	金銅装	5.9	4.5	1.31	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
—	東京 塚越14号横穴	III b?	金銅装	6.1	4.1	1.49	無文	円形	—	無窓鐔	横佩か	—
—	千葉 伝富津市飯野	III b?	金銅装	5.9	3.9	1.51	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	千葉 白姫塚	III b?	金銅装	6.1	3.7	1.65	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
25	千葉 御山 SX015	III b	金銅装	6.0	4.0	1.50	横畦目	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
—	群馬 綜三郷村88号	III c	金銅覆輪装	5.9	4.3	1.37	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	横佩	平尻
—	鳥根 鷲の湯病院跡	III c	金銅覆輪装	6.0	3.5	1.71	無文	円形	—	—	吊手孔付佩用金具	—
—	茨城 赤浜	III c?	金銅覆輪装?	—	—	—	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
26	長野 六万部	III c	金銅覆輪装	4.3	3.3	1.30	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	群馬 伝渋川市豊秋	III c	金銅覆輪装	5.8	4.7	1.234	無文	円形	—	—	—	—
円頭Ⅳ式（鉄製金銀象嵌） ※主要例のみ												
29	滋賀 北谷7号	IV a	鉄製	4.2	4.0	1.05	龍文	—	—	—	—	—
31	奈良 星塚2号	IV a	鉄製	4.9	4.4	1.11	亀鳳文	—	—	—	—	—
—	大阪 山畑22号	IV a	鉄製	5.2	4.4	1.18	花文	—	—	—	—	—
30	香川 母神山	IV b	鉄製	6.3	3.9	1.62	鬼面文	—	—	—	—	—
—	兵庫 勝福寺	IV b	鉄製	4.8	3.6	1.33	—	—	銀線巻	呑口	—	—
32	愛知 権現山	IV b	鉄製	7.0	4.1	1.71	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
33	群馬 伝藤岡市北郷	IV b	鉄製	6.7	4.3	1.56	亀鳳文	円形	—	—	—	—
34	群馬 平井1号	IV b	鉄製	7.8	4.2	1.86	亀鳳文	円形	銀線巻	象嵌蒲鉾鐔	横佩か	平尻・蟹目釘
35	鳥根 岡田山1号	IV b	鉄製	7.8	4.2	1.86	亀鳳文	円形	銀線巻	象嵌無窓鐔	横佩か	—
36	大阪 芝塚 (1)	IV b	鉄製	6.1	4.6	1.33	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
37	群馬 伝高崎市岩鼻	IV b	鉄製	7.2	4.2	1.71	亀鳳文	円形	—	—	—	—
38	宮城 鷹ノ巣	IV b	鉄製	8.2	4.1	2.00	亀鳳文	円形	—	—	—	—
39	茨城 梶山	IV b	鉄製	6.6	4.5	1.47	亀鳳文	円形	有機物か	—	—	—
40	福岡 塚花塚	IV b	鉄製	7.8	4.5	1.73	亀鳳文	円形	—	—	—	—
41	静岡 原分	IV b	鉄製	8.5	5.4	1.57	亀鳳文	円形	—	象嵌八窓鐔	—	—
—	埼玉 秋山古墳群	IV b	鉄製	10.0	5.6	1.79	亀鳳文	円形	—	象嵌八窓鐔	—	—
—	千葉 瓢塚40号	IV b	鉄製	6.0	4.1	1.46	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
—	石川 蝦夷穴	IV b	鉄製	6.9	3.8	1.82	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌八窓鐔	吊手孔付佩用金具	銀象嵌平尻
42	大阪 芝塚 (2)	IV c	鉄製	4.8	3.5	1.37	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
43	福岡 鬼塚2号 (1)	IV c	鉄製	4.2	3.5	1.20	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
44	福岡 鬼塚2号 (2)	IV c	鉄製	3.8	2.6	1.46	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
45	福島 中田	IV c	鉄製	4.2	3.5	1.20	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
46	栃木 赤麻	IV c	鉄製	2.7	2.9	0.93	心葉文	円形	—	—	—	—
47	東京 久ヶ原48号	IV c	鉄製	5.0	2.7	1.85	心葉文	円形	—	—	—	—
48	栃木 トトコチ山	IV b	鉄製	12.2	6.3	1.94	唐草文	円形	有機物か	象嵌八窓鐔	—	平尻
円頭Ⅴ式（木芯塗装）												
—	三重 平田14号	V	木芯塗装	—	—	—	無文	—	有機物巻	板状鐔	—	銀象嵌丸尻
27	東京 岡本1号横穴	V	木芯塗装	4.8	3.7	1.30	無文	円形	銅線巻	喰出鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	福島 阿弥陀壇土坑	V	木芯塗装	4.2	3.1	1.35	無文	円形	糸巻	喰出鐔	吊手孔付佩用金具	平尻
28	北海道 フゴッパ洞窟	V	木芯塗装	4.3	3.1	1.39	無文	円形	糸巻	喰出鐔	—	—
—	奈良 正倉院	V	木芯塗装	4.1	2.8	1.46	無文	円形	糸巻	喰出鐔	（双脚佩用金具）	（平尻）

(バーレン内は不確実な情報であることを示す)

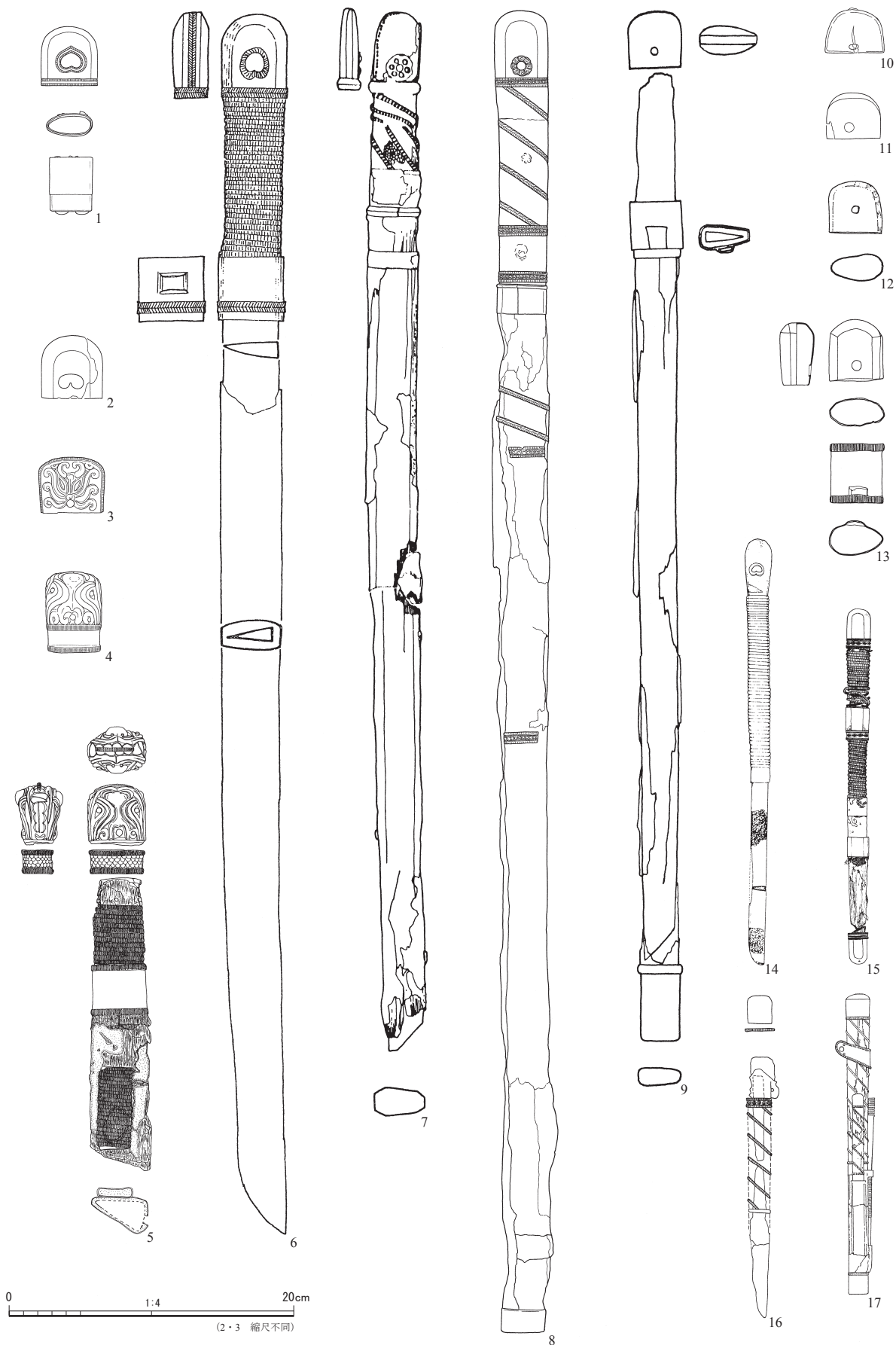


Fig.83 朝鮮半島出土円頭大刀・刀子の諸例

1: 宋山里4号 2・3: 金冠塚 4: 伝朝鮮(小倉コレクション) 5: 伝高靈(金東鉉コレクション) 6: 校洞11号 7: 伝朝鮮(神林淳雄資料) 8: 伝連山里(小倉コレクション) 9: 夫婦塚 10: 林堂6A号 11: 宋山里6号 12: 校洞7号 13: 伝朝鮮(李養璿コレクション) 14: 新村里9号乙棺 15: 武寧王陵 16: 金冠塚 17: 金鈴塚

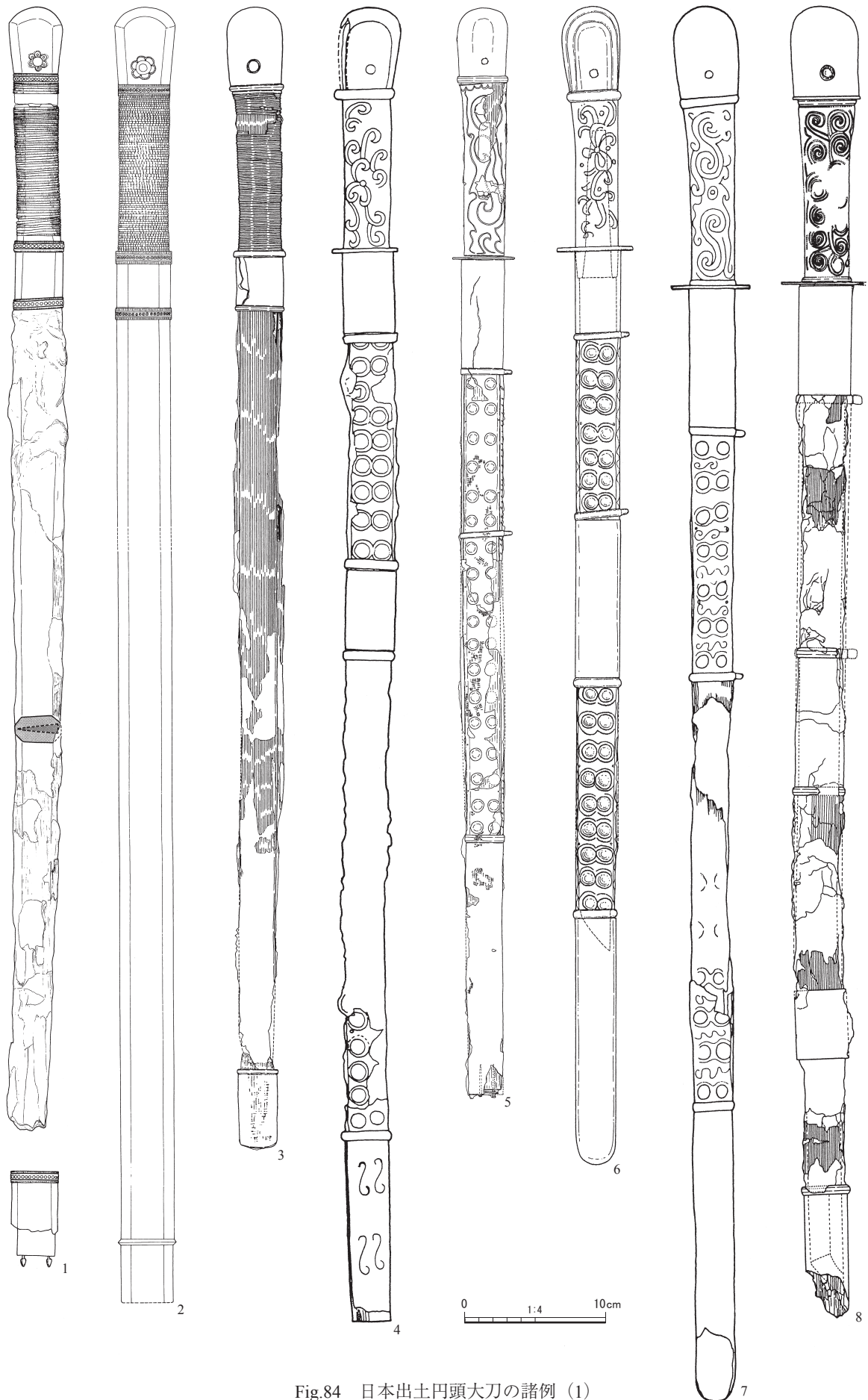


Fig.84 日本出土円頭大刀の諸例 (1)

1: 岡田山1号 2: 藤ノ木 3: 風返稻荷山 (2) 4: 綜三郷村88号 5: 風返稻荷山 (3) 6: 御山 SX015 7: 川内天王山 8: 宮口11号

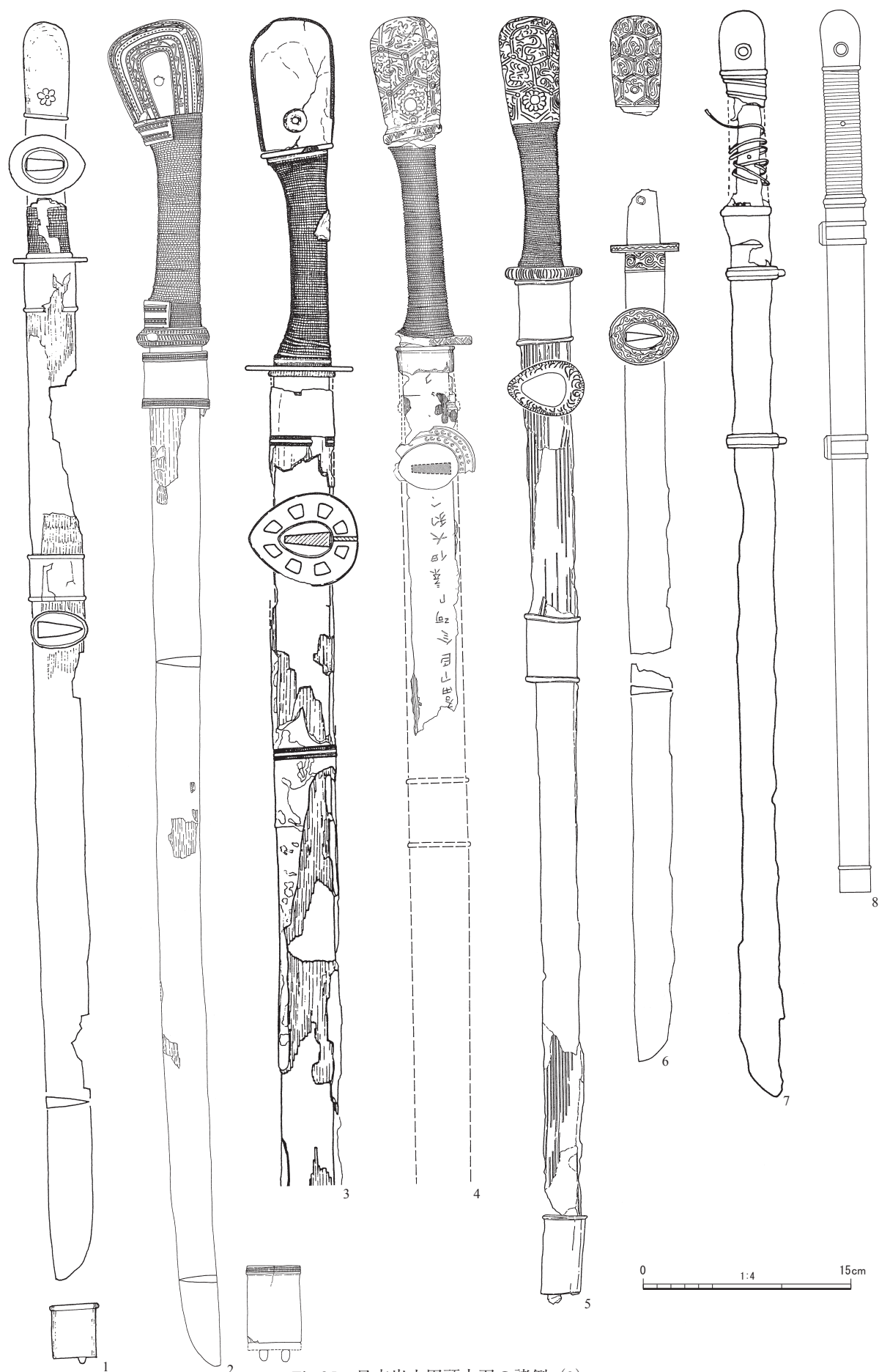


Fig.85 日本出土円頭大刀の諸例 (2)

1: 古天神 2: 別処山 3: 上塩冶築山 4: 岡田山1号 5: 平井1号 6: 権現山 7: 岡本1号横穴 8: 正倉院

円頭Ⅴ式 木芯漆装の円頭Ⅴ式には、三重県平田14号墳例のように鉄製銀象嵌の鞘尻金具が伴うものがある。柄間は糸巻きにされるものが多く、板状鏝や喰出鏝が伴う。吊手孔付佩用金具が附属する個体があり、横佩にされていたことが分かる。円頭Ⅴ式はここに設定した各型式と比べて新しい段階に出現したものとみられ、奈良時代の正倉院宝物の中にも類例を見出すことができる。

各型式の変遷 円頭大刀各型式の大まかな変遷観を示しておきたい。円頭Ⅰ式の初現は、宋山里4号墳例や金冠塚古墳例、林堂6A号例などの事例から5世紀末（TK47型式期）に位置づけられる。円頭大刀出現の当初から、Ⅰa式とⅠb式の双方が並存していたとみられる。円頭Ⅰa式の下限は鳥居松遺跡例で検討したように武寧王陵出土資料（527年以前、MT15型式期）を若干降る時期、6世紀前葉（TK10型式古相期）に求めておきたい。

円頭Ⅱ式の出現時期は、武寧王陵から出土した2点の円頭刀子柄頭の長幅比が1.24と1.64であることから、MT15型式期とみられる。その下限は岡田山1号墳例や藤ノ木古墳例、宇洞ヶ谷横穴例が示すTK43型式期前半と捉えられる。円頭Ⅱa式にみられる花形飾りは単龍鳳Ⅲ式からⅣ式（新納1982）の筒金具にみられる装飾に通じ、およそその併行関係（TK10型式新相期～TK43型式期前半）を示すことができる。円頭Ⅱ式の中心的な時期を示すものと捉えておきたい。

円頭Ⅲ式は、銀線巻柄間（円頭Ⅲa式）→金銅線巻柄間（円頭Ⅲa式）→金銅板張柄間（円頭Ⅲb式）といった変遷の傾向が指摘できる（日高2000）。鞘尻金具も平尻から丸尻へ変化し、円頭Ⅲb式には吊手孔付佩用金具が伴うものが多い。円頭Ⅲa式は他の金属線巻柄間をもつ装飾大刀との併行関係（単龍鳳Ⅴ式など）からTK43型式期後半に併行すると捉えられる。いっぽう、円頭Ⅲb式は装飾大刀外装の斉一化以後の製品であり、単龍鳳Ⅵ式併行段階、6世紀末（TK209型式期前半期）におおよその年代を求めうる。また、覆輪を伴う円頭Ⅲc式の出現時期は、鳥根県鷲の湯病院跡横穴例や長野県六万部古墳例などの拵えの特徴から、円頭Ⅲb式と同時期と捉えられる。

円頭Ⅳ式の存続期間は比較的長い。古相を示す短頭の円頭Ⅳa式の時期については円頭Ⅰ式との形態的な類似から、TK47型式期～TK10型式古相期に接点が見出せる。いっぽう、円頭Ⅳb式は古相段階にみられる象嵌には、懸通孔の周りに花形模様をあしらうものがあることから、円頭Ⅱa式の時期（TK10型式新相期～TK43型式期前半）に重なることが知られる。円頭Ⅳc式は、円頭Ⅳb平井1号式の象嵌模様との関連から6世紀末（TK209型式前半期）以降に出現したものと捉えられる。

円頭Ⅴ式は最も遅れて出現した系列で、正倉院宝物に知られることから8世紀代まで系譜が追える。その初源期は、東京都岡本1号横穴例にみる吊手孔付佩用金具の特徴や、平田14号墳例にみる銀象嵌鞘尻金具の模様構成などから、7世紀初頭（TK209型式後半期）とみて大過ない。

（4）結 語

以上、鳥居松遺跡出土の円頭大刀の分析を通じ、朝鮮半島と日本列島の双方から出土する円頭大刀の変遷をあとづけることができた。鳥居松遺跡例は諸属性にみられる類例から、加耶もしくは百済で製作されたとみられること、その製作時期は6世紀前葉（TK10型式古相期）を前後する頃とみられることを示した。鳥居松遺跡例に採用されている木彫金銀張技法についても、従来の認識の

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

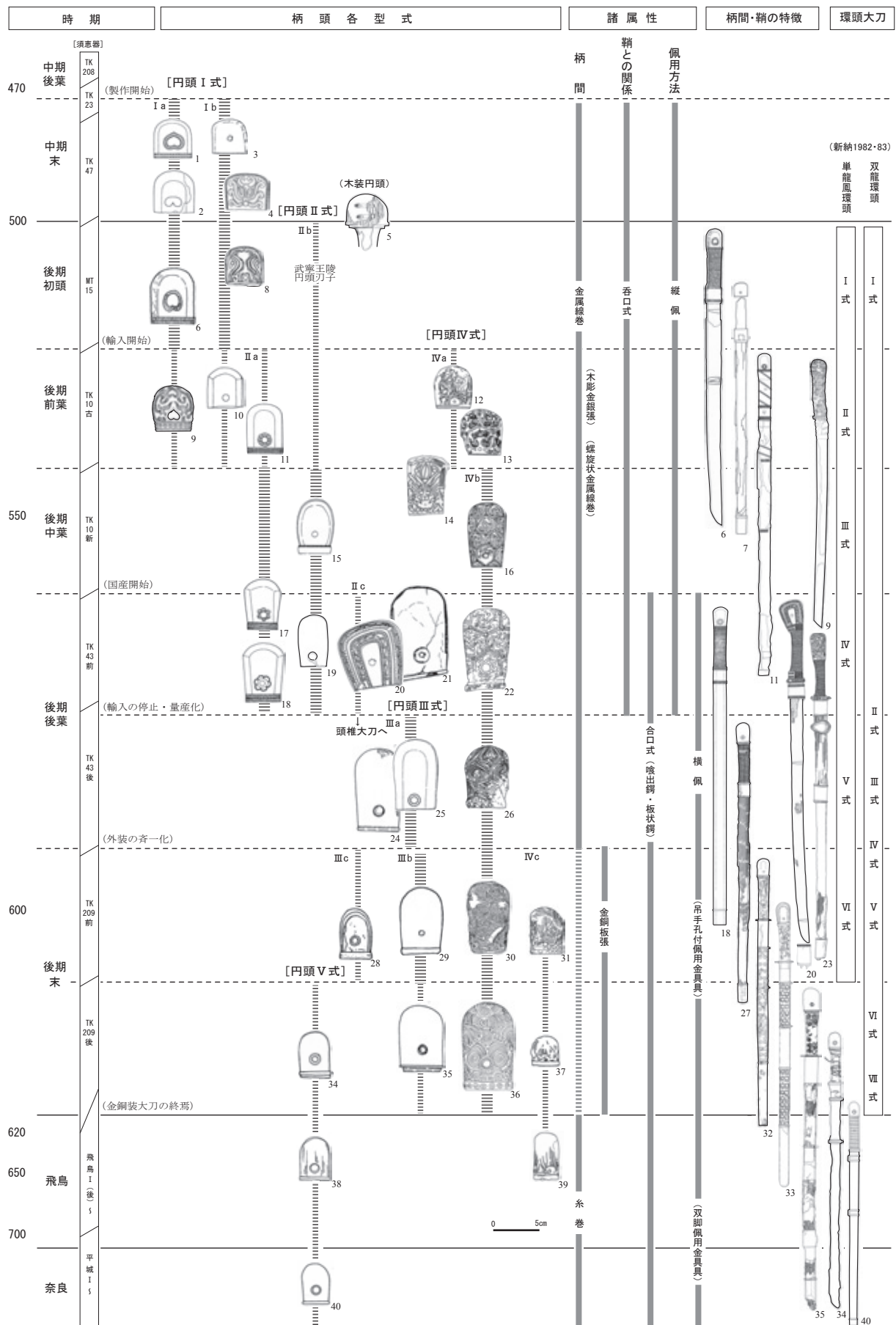


Fig.86 円頭大刀変遷図
(出土地：P.52 参照)

ように、倭における独自性と捉える必要がなくなったことも特筆できる。鳥居松遺跡例の埋没時期は、同一層位から出土した土器（SX05 出土遺物）から、6 世紀後葉（TK43 型式期）であることが判明しており、その使用期間は比較的長期であったことが分かる。使用期間中に、柄頭への金銀板の鈹打ちや責金具の追加といった補修が行われたとみられる。

鳥居松遺跡例の出土により、従来、系譜が不明瞭であった装飾大刀の柄間や鞘にみられる渦文は、連続波頭文に遡源のひとつが辿れることが明確になった。連続波頭文そのものの起源は今後の検討課題であるが、北魏の石製台座や金銅仏にみられる模様に源流の一端を求めることができる可能性を示した。柄間を金銅板で覆う技法の遡源を辿る上でも、鳥居松遺跡例がもつ重要性は高い。

円頭大刀の型式分類と時期は概略を示したに過ぎないが、分布の時期的な変遷をあとづける上でも必要な作業である。今後は、各型式の円頭大刀に伴う装具などの相互比較を通じ、他形式の装飾大刀との関係を追求する姿勢が求められるだろう。

【参考文献】

- 置田雅昭 1985「古墳時代の木製刀柄装具」『天理大学学報』第 145 輯 天理大学学術研究会
- 大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター
- 勝部明生・鈴木 勉 1998『古代の技―藤ノ木古墳の馬具は語る―』吉川弘文館
- 小林義孝・有井宏子 1996「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀―龍文銀象嵌鞘金具付振り環頭大刀―」『研究紀要』第 7 号 八尾市歴史民俗資料館
- 瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』No.266 ニューサイエンス社
- 新納 泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第 65 巻第 4 号
- 新納 泉 1983「武器」『湯舟坂 2 号墳』久美浜町教育委員会
- 新納 泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第 3 号
- 西山要一・山口誠治・李午熹 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』第 9 集 （財）韓国文化研究振興財団
- 橋本博文 1986「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』No.266 ニューサイエンス社
- 橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 橋本英将 2006「『折衷系』装飾大刀考」『古代武器研究』Vol.7 古代武器研究会
- 日高 慎 2000「風返稲荷山古墳出土の飾大刀と佩用方法について」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 町田 章 1986「環頭大刀二三事」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 町田 章 1987「岡田山 1 号墳の儀杖大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 町田 章 1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要』第 6 号
- 町田 章 1997「加耶の環頭大刀と王権」『加耶諸国の王権』仁済大加耶文化研究所（韓国）
- 松尾充晶 2003「装飾付大刀」『考古資料大観』第 7 巻 弥生・古墳時代 鉄・金属製品 小学館
- 山本忠尚 2006「囲屏石牀の研究」『中国考古学』第 6 号 日本中国考古学会
- 金 洛中 2007「6 世紀栄山江流域の装飾大刀と倭」『栄山江流域古代文化の成立と発展』学研文化社（韓国）
- 李 漢祥 2006「漢城百濟装飾大刀の製作技法」『漢城から熊津へ』國立公州博物館（韓国）

〔古墳・遺跡文献〕

中 国

大同南郊 M112：山西大学歴史文化科学院ほか 2006『大同南郊北魏墓群』科学出版社（中国）

大同雁北師院 M5：劉俊喜（編） 2008『大同雁北師院北魏墓群』大同市考古研究所 文物出版社（中国）

大同南郊人物文硯：解廷琦 1979「大同市郊出土北魏石彫方硯」『文物』1979-7（中国）、曾布川寛ほか 2005『中国☆美の十字路展』大広新田グループコレクション（北魏金銅仏）：金子啓明・山本勉（編） 1987『特別展金銅仏—中国・朝鮮・日本—』東京国立博物館

朝鮮・韓国

南浦双楹塚：共同通信社 2005『高句麗壁画古墳』

天安花城里 A1 号：金吉植ほか 1991『天安花城里百済墓』国立公州博物館（韓国）

公州宋山里 4 号（旧 1 号）：野守健・神田惣蔵 1935「公州宋山里古墳調査報告」『昭和二年度古蹟調査報告』第 2 冊 朝鮮総督府

公州宋山里 6 号：有光教一・藤井和夫（編） 2002『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ』（財）東洋文庫

公州武寧王陵：金元龍ほか 1973『武寧王陵』文化財管理局（韓国）

羅州新村里 9 号：穴沢咏光・馬目順一 1973「羅州潘南古墳群—梅原考古資料による谷井済一氏発掘遺物の研究—」『古代学研究』第 70 号、国立文化財研究所 2001『羅州新村里 9 號墳』（韓国）

羅州伏岩里 3 号：国立文化財研究所 2001『羅州伏岩里 3 號墳』（韓国）

慶州金冠塚：濱田耕作・梅原末治 1924・1927『慶州金冠塚と其の遺寶』古蹟調査特別報告 第三冊 朝鮮総督府

慶州金鈴塚：梅原末治 1931・1932『慶州金鈴塚飾履塚』『大正十三年度古蹟調査報告』第一冊 図版・本文 朝鮮総督府

慶州鷄林路 14 号：穴沢咏光・馬目順一 1980「慶州鷄林路 14 号墓出土の嵌玉金装短剣をめぐる諸問題」『古文化談叢』第 7 集 九州古文化研究会

慶山林堂 6A 号：鄭永和ほか 2003『慶山林堂地域古墳群Ⅶ 林堂 5・6 號墳』嶺南大學校博物館（韓国）

伝高靈（金東鉉コレクション）：湖巖美術館 1997『湖巖美術館所蔵金東鉉蒐集文化財』（韓国）

昌寧校洞 7・11 号：穴沢咏光・馬目順一 1975「昌寧校洞古墳群—「梅原考古資料」を中心とした谷井済一氏発掘資料の研究—」『考古学雑誌』第 60 巻第 4 号

梁山夫婦塚：小川敬吉 1927「梁山夫婦塚と其遺物」『古蹟調査特別報告』第 5 冊 朝鮮総督府、沈奉謹 1991『梁山金鳥塚・夫婦塚』東亞大學校博物館（韓国）

陝川玉田 M3 号：趙榮濟・朴升圭 1990『陝川玉田古墳群Ⅱ M3 號墳』慶尚大學校博物館（韓国）

伝朝鮮（李養瑢コレクション）：国立慶州博物館 1987『菊隠李養瑢蒐集文化財』（韓国）

伝連山里・伝朝鮮（小倉コレクション）：東京国立博物館 1982『寄贈小倉コレクション目録』、国立文化財研究所 2005『日本東京国立博物館所蔵小倉コレクション韓国文化財』（韓国）

伝朝鮮（東京国立博物館蔵）：早乙女雅博・東野治之 1990「朝鮮半島出土の有銘環頭大刀」『MUSEUM』第 467 号 東京国立博物館、李漢祥 2006「漢城百済装飾大刀の製作技法」『漢城から熊津へ』国立公州博物館（韓国）

伝朝鮮（神林淳雄資料）：瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会

日 本

北海道フゴッペ洞窟：野村崇・瀧瀬芳之 1990「北海道余市町フゴッペ洞窟前庭部出土の鉄製武器」『古代文化』第 42 巻第 10 号

宮城県鷹ノ巣：村山斌夫 1987「出土金属製遺物の自然科学的調査と保存処理について」『東北歴史資料館研究紀要』第 13 巻

福島県阿弥陀壇：佐藤千春・高松俊雄 1979『阿弥陀壇』郡山市教育委員会

福島県中田横穴：馬目順一ほか 1971『中田装飾横穴』いわき市史・別巻 いわき市、西山要一 1981「X線透過試験による古墳時代円剣の調査」『出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用』元興寺文化財研究所

栃木県別処山：斎藤光利ほか 1992『別処山古墳』南河内町教育委員会

栃木県トトコチ山：佐野市 1975「トトコチ山古墳」『佐野市史』資料編 1、佐野市郷土博物館 1986『よみがえる古墳—佐野とその周辺—』

- 栃木県赤麻：橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 茨城県風返稻荷山：千葉隆司（編）2000『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 茨城県伝舟塚：本田伸之 2006「伝舟塚資料」『玉里村の歴史』玉里村
- 茨城県梶山：汀安衛ほか 1981『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会
- 茨城県赤浜：長谷川聡 2009『平成21年特別展 かがやきにこめた権威と莊厳—金と銀の考古学—』茨城県立歴史館
- 群馬県伝渋川市豊秋：末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂
- 群馬県台所山：町田章 1986「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論文集 山陰考古学の諸問題』
- 群馬県綿貫観音山：徳江秀夫（編）1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』群馬県教育委員会
- 群馬県伝旧多野郡八幡村（高崎市八幡町）・伝高崎市上豊岡・綜三郷村88号（伊勢崎市安堀町）：瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 群馬県伝藤岡市小林：山内紀嗣 1992「天理参考館所蔵の金銅装銀頭大刀」『天理参考館報』第5号、山内紀嗣 1996「天理参考館所蔵の双龍銀頭柄頭」『天理参考館報』第9号
- 群馬県平井1号：志村哲 1993『平井地区1号古墳』藤岡市教育委員会
- 群馬県伝高崎市岩鼻・伝藤岡市北郷：西山要一・山口誠治・李午憲 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』第9集（財）韓国文化研究振興財団
- 埼玉県秋山古墳群：瀧瀬芳之・野中仁 1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌大刀—」『研究紀要』第12号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉県金鈴塚：酒巻忠史 2007『木更津市文化財調査集報 金鈴塚古墳出土遺物の再整理2 —大刀の実測—』木更津市教育委員会
- 千葉県山王山：小出義治ほか（編）1980『上総山王山古墳』市原市教育委員会、新納泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号
- 千葉県生実所在：白井久美子ほか 1992『房総考古学ライブラリー6』（財）千葉県文化財センター
- 千葉県新坂1号：石本俊則ほか 1995『新坂遺蹟・東風吹山遺蹟・蒲野遺蹟・西後藤遺蹟』（財）山武郡文化財センター
- 千葉県白姫塚、鶴巻塚：白石太郎・白井久美子・山口典子 2002『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』千葉県
- 千葉県瓢塚40号：安藤鴻基 1990「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『千葉県立房総風土記の丘年報』13
- 千葉県城山1号：丸子亘ほか 1978『城山第一号前方後円墳』小見川町教育委員会
- 千葉県御山SX015：渡辺修一・矢本節朗 1994『四街道市 御山遺蹟（1）』（財）千葉県文化財センター
- 東京都岡本1号横穴：桜井清彦・大川清 1959「東京都世田谷区岡本町横穴古墳調査報告」『古代』第32号、瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 東京都塚越14号横穴・久ヶ原48号横穴：野本孝明（編）1994『考古学からみた大田区—横穴墓・古代・中世 資料編—』大田区教育委員会
- 新潟県宮口11号：泰繁治ほか 1976『宮口古墳群』牧村教育委員会
- 長野県塚穴原1号：塩入秀敏・米山一政ほか 1976『塚穴原第1号古墳発掘調査報告書』上田市教育委員会
- 長野県六万部：片桐村誌編纂委員会 1966『片桐村誌』、長野県 1988『長野県史』考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物
- 石川県蝦夷穴：富田和気夫ほか 2001『史跡 須曾蝦夷穴古墳Ⅱ』能登島町教育委員会
- 静岡県原分：井鍋誉之（編）2008『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県石川T3号：滝沢誠・菊池吉修 2002「石川古墳群」『沼津市史』資料編 考古 沼津市
- 静岡県宇洞ヶ谷横穴：向坂鋼二ほか 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会
- 静岡県明ヶ島15号：室内美香ほか 2003『東部土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 静岡県山ノ花：（財）浜松市文化協会 1998『山ノ花遺蹟』
- 愛知県権現山：小笠原久和 2005「権現山古墳」『愛知県史』資料編3 古墳 愛知県
- 三重県井田川茶白山：小玉道明（編）1988『井田川茶白山古墳』三重県教育委員会
- 三重県平田14号：竹内英昭ほか（編）1987『平田古墳群』安濃町遺跡調査会

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

- 滋賀県北谷7号：西田弘 1992「草津市北谷古墳群の調査」『平成2年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会
- 大阪府芝塚：高萩千秋 1993『芝塚古墳』（財）八尾市文化財調査研究会
- 大阪府山畑22号：西山要一 1986「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』第72巻第1号
- 大阪府三日月13号：尾谷雅彦・鳥羽正剛 1994『三日月市遺跡調査報告書Ⅲ』河内長野市遺跡調査会
- 京都府穀塚：京都大学総合博物館 1997『王者の武装』
- 兵庫県勝福寺：木村次雄 1929「摂津の鈴鏡出土の古墳」『考古学雑誌』第19巻第11号
- 奈良県星塚2号：小島俊次 1955「奈良県天理市上之庄 星塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第7輯 奈良県教育委員会、町田章 1987「岡田山1号墳の儀杖大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 奈良県珠城山1号：伊達宗泰・小島俊次 1956『珠城山古墳』奈良県教育委員会
- 奈良県藤ノ木：前園実知雄 1995『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県新沢327号：千賀久 1989「新沢千塚の鉄刀剣」『大和考古資料目録16』X線調査資料（1）奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館
- 奈良県布留：山内紀嗣ほか 1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団
- 奈良県正倉院：正倉院事務所（編）1977『正倉院の大刀外装』小学館
- 岡山県穴が澄：上橋武 2008「穴が澄古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告書213』岡山県教育委員会
- 鳥根県古天神：高橋健自 1919「出雲国八束郡大草古天神山古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第9巻第5号、山本清 1968「古天神古墳」『鳥根県文化財調査報告書』第5集 鳥根県教育委員会
- 鳥根県かわらけ谷横穴墓群：松尾充晶（編）2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』鳥根県古代文化センター
- 鳥根県上塩冶築山：松本岩雄（編）1999『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター
- 鳥根県岡田山1号：松本岩雄（編）1987『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 鳥根県鷺の湯病院跡横穴：山本清 1984「横穴被葬者の地位をめぐって」『鳥根県考古学会誌』第1集、大谷晃二・松尾充晶 2004「鳥根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『鳥根県考古学会誌』第20・21集合併号
- 香川県母神山古墳群：町田章 1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要』第6号
- 福岡県鬼塚：橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 福岡県平等寺向原Ⅰ-1号：安部裕久 1992『平等寺向原Ⅰ』宗像市教育委員会
- 宮崎県狐塚：東憲章・岡本武憲・柄本久子 2006「宮崎県日南市風田に所在する狐塚古墳の出土遺物」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第2号
- 宮崎県島内114号地下式横穴：中野和浩（編）2009『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡』えびの市教育委員会

〔図出典等〕

Fig.75～77、79、80、82～85：各報告文献より引用、一部改変再トレース Fig.78:1～3は〔町田1997〕、4は〔町田1986〕より、左記以外は各報告文献より引用 Fig.86：各報告文献より引用のうえ筆者作成

Fig.86の出土地

- 1: 宋山里4号 2: 4: 金冠塚 3: 校洞7号 5: 布留 6: 校洞11号 7: 夫婦塚 8: 伝高霊（金東鉉コレクション） 9: 鳥居松 10: 伝朝鮮（李養璫コレクション） 11: 伝連山里（小倉コレクション） 12: 北谷7号 13: 星塚2号 14: 母神山古墳群 15: 穴が澄 16: 権現山 17: 22: 岡田山1号 18: 藤ノ木 19: 宇洞ヶ谷横穴 20: 別処山 21: 上塩冶築山 23: 平井1号 24: 風返稲荷山（1） 25: 鶴巻塚 26: 芝塚 27: 風返稲荷山（2） 28: 六万部 29: 川内天王山 30: 塚花塚 31: 鬼塚2号 32: 風返稲荷山（3） 33: 御山SX015 34: 岡本山1号横穴 35: 宮口11号 36: 原分 37: 赤麻 38: フゴッペ洞窟 39: 久ヶ原48号横穴 40: 正倉院